

# 主体的な遊びを支える保育実践に関する一考察

— 実践を困難にしている要因 —

佐々木 由美子・大谷 真理子

Early Childhood Education through Self-Motivated Play of Children Factors  
that Make it Difficult to Practice

Yumiko Sasaki and Mariko Otani

## 要 旨

子どもの主体的な学びや遊びの重要性については周知され、主体的な遊びに関する研究も近年盛んに行われている。しかし、現場の保育者からは実践に苦慮する声がたびたび聞かれるのも事実である。これまでの先行研究では、子どもの主体的な遊びや活動に寄与する環境や保育者の役割についての検討や、実践に伴う課題について論究はみられるものの、保育現場でどのような事象によって保育者が困難を感じ、取り組みを進めることを難しくさせているのかについて詳細な検討は見当たらない。本論では、現職保育者へのヒアリングや討論会を通して、「なぜできないのか」「何が実践を阻んでいるか」ということを詳細に検討し、明らかにすることで、実践にむけての基盤構築の第一歩としたい。

キーワード：主体的な遊び、実践の課題、困難

## 1. はじめに

### (1) 問題と目的

子どもは自らの意思をもって主体的に生活や遊びに取り組み、感動を通して身近な事象について学ぶ。また、協働する大人や仲間との関係の中で社会性を培い、自分らしい取組みかたや感情の動きを経験しながら自己を形成していく。子どもを自ら学ぶ存在と位置づけ、子ども自身の主体的な取り組みを尊重していくことが、現在の我が国における保育の土台となっている。これは我が国の保育の歴史の中で、倉橋惣三以来受け継がれてきた保育思想に根差すものであり、1989（平成元

年の幼稚園教育要領改訂において、さらに明確に示されてきた。昨年（2018年）施行された新しい幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領においても、子どもの主体的な生活と遊びの重要性がより強調されている。幼稚園教育要領解説の中では幼児期を「直接的・具体的な体験を通して、人格形成の基礎を培う時期」（幼稚園教育要領解説）ととらえており、「幼児期は、環境と能動的に関わることを通して、周りの物事に対処し、人々と交渉する際の基本的な枠組みとなる事柄についての概念を形成する時期」（幼稚園教育要領解説）である。「幼児は、興味や関心をもったものに対して自分から関

わろうとする。したがって、このような能動性が十分に発揮されるような対象や時間、場などが用意されることが必要である。特に、そのような幼児の行動や心の動きを受け止め、認めたり、励ましたりする保護者や教師などの大人の存在が大切である」(幼稚園教育要領解説)と示されるように、子どもの能動性の発揮を促す実践の重要性が示されている。

このような背景の中で、子どもの主体的な遊びや生活を支えるための保育実践についての研究も盛んに行われている。特に昨年の幼稚園教育要領、保育所保育指針等の改訂に向けて、多くの研究が示されている。上村(2017)<sup>(1)</sup>や坪井・松本(2017)<sup>(2)</sup>は、子どもの主体的な遊びや活動に寄与する環境や、保育者の役割について検討している。また、中坪(2017)<sup>(3)</sup>、秋田(2017)<sup>(4)</sup>は主体的な遊びについての論考の中で実践に伴う課題について言及している。特に秋田(2017)<sup>(4)</sup>は「主体的な遊び」における保育の三つのアポリアとして主体的な遊びを妨げないために意識する必要がある課題を3点に整理して示しており、主体的な学びを支える保育実践を行う上での指針は整いつつあると言ってよいだろう。

しかし、実際に保育を行う保育者からは子どもの主体性を尊重し、具体的、直接的体験を重視する保育実践を行う難しさについてたびたび耳にするのも事実である。そしてその声は決して一部少数の保育者の声ではないと考えられるのである。しかし、先行研究ではそのような現状について言及するものは見当たらない。秋田の示すアポリア(難題)も保育者の置かれている現状を踏まえてのものであるが、その詳細については示されていない。多くの保育者が実践に苦慮する現在「なぜできないのか」「何が実践を阻んでいるか」ということを詳細に検討し、現状について正確に把握することが必要なのではないかと考える。それにより、子どもの主体的な遊びを支える保育実践を作り出していくための手掛かりや、解決すべきポイント、現場を支援する際の手掛かりを見出すこ

とできるのではないかと考える。

よって本研究では、子どもの主体的な遊びを支える実践において、保育者がどのようなことに困難を感じているのかについて調査検討する。

## (2) 研究の方法

幼稚園・保育所の保育者を対象とし、子どもたちの主体的な遊びの実践例を視聴後、感想及び自園での実践について、座談会形式でヒアリングを行う。ヒアリングは2017年11月から2018年1月までの期間に合計4回開催し、13名(15園、2名が複数の園に就労)の保育者にご協力いただいた(詳しくは表1を参照のこと)。

主体的な遊びの実践例にはDVD『映像で見る主体的な遊びで育つ子ども あそんでぼくらは人間になる』(大豆生田・中坪2016)を用いた。このDVDは、広島県廿日市市にある私立かえで幼稚園の子どもたちの日常の経験が15のエピソードにわけて取められ、テキストとあわせて教材化されたものである。かえで幼稚園に定期的に訪問してきた中坪(2016)が「私の中で子どもの主体的な遊びと育ちについて思索する際の拠り所」<sup>(5)</sup>と述べているように、主体的な遊びを考えていく上で適切であると考えたからである。

本調査にあたっては、15のエピソードの中から、「箱んでハイタワー」「新記録と涙」「みんなのビール工場」の3つを選び、視聴することとした。「箱んでハイタワー」は、年長のあおぞら組とたいよう組が、どうしたら箱を高く積むことが

表1

職 種	幼稚園教諭	6名
	保育士	7名
	(公立5、私立1、認可外1)	
年 代	20代	12名
	30代	1名
保育経験年数	1-3年	9名
	4-10年	4名
性 別	女性	13名

できるかを試行錯誤しながら競い合うエピソードである。「新記録と涙」は、長縄跳びの記録をめぐる葛藤、「みんなのビール工場」は砂場でのダム作りのエピソードである。

調査対象者には事前に本研究の内容を説明後、了承を得て座談会を録音し、後日テキストに起こし検討を行った。分析は会話の中から、主体的な子どもの遊びを支える保育実践を行う上で制限となっているエピソードを抽出し、その実態を検討した。エピソードの抽出は筆者2名の一致をもって確認した。

## 2. 実践を阻む要因

今回のヒアリングにおいて、抽出されたエピソードは全部で72エピソードとなった。その内6エピソードは映像のような実践を自園でも行うことができる、または行ったことがあるという、実践への課題は少ないとするものであった。このエピソードは今回調査に参加した13名の保育者の中で、2名の保育者が語ったものである。これは、主体的な遊びを支える保育実践を行うことができる環境にいる保育者が、相対的に少ないことを表しているのではないかと考えられる。そして、その他の66エピソードは、何らかの理由において、主体的な遊びを支えるための保育実践を行うことができないというエピソードである。(表2)

表2

全エピソード 72				
実践を阻んでいる要因			実践への課題が少ない	
外的要因	①園の方針、環境、決まり事による制限	42	⑤自園で実践できるとした発言	6
	②保育者の実践力の不足	11		
内的要因	③保育者間のチームワークの課題	6		
	④その他	7		

この何らかの理由により実践が阻まれているとされる66エピソードの内容を見ていくと、外的要因と内的要因の二つに分類することができた。外的要因は、一保育者の努力では解決することが難しい課題によって、保育実践が阻まれている場合である。それに対し、内的要因は保育者自身または保育者集団が抱えている課題によって、保育実践が阻まれているものである。この外的要因、内的要因の内容を詳細に検討することで、主体的な遊びを支える保育実践を行う上で解決していくべき課題の所在を明らかにすることができると考えられる。よって、次章以降でこの外的要因と内的要因の内容について詳述する。

## 3. 外的要因

外的要因は、一保育者の努力では解決していくことが困難なものであり、内容を検討した結果、「園の方針、保育形態」「就業体系、人員不足、時間的制約」「物的環境」の大きく3つに分類された。

### (1) 園の方針、保育形態

42あるエピソードの中で、20のエピソードが、勤めている園の方針や保育の形態によって子どもの主体的な遊びを支える保育実践が阻まれていると思われるものであった。ここではその特徴的なエピソードを示し、検討する。尚、どの映像の視聴後に発言されたエピソードであるかを明確にするため、エピソードの末尾に映像のタイトルを示した。(タワー)は「箱んでハイタワー」、(涙)は「新記録と涙」、(ビール)は「みんなのビール工場」の略である。

まず、園の保育方針や保育形態のために、実践が困難となっているエピソードである。

例えば、制作で同じものを作ったとしても、ちょっと違うところにこれかいてみようとかそういうのが絶対できないんですよ。なんでこの子は違うことかいてるのとかって上から言われちゃうんですよ。(タワー)

このエピソードは「箱んでハイタワー」の中で、子どもたちが工夫しながら課題を解決していく様子を視聴し、自園との違いを語っている。園の方針として、子どもたち全員がそろって同じものを制作することが望ましいととらえていることがうかがわれる。子どもの主体的な遊びを支えていくためには、その土台として、子どもが自らの思いや考えを自由に表現し、試すことができることが重要である。しかし、上記のエピソードに代表されるように、そもそも園の保育方針や形態が、子どもの自由な表現を認め難い形となっている現状があることがわかる。

次のエピソードは、園独自のルールが実践の阻害要因となっている例である。

これがお砂場だとしたら、この中のお砂場を外に出しちゃいけないっていう謎のルールがあるんですよ。

この中の砂はお砂場の砂だから、出しちゃいけないから、この辺に机があって小屋みたいなものがあるんだけど、そこに持ってくるまでにこぼしちゃいけないから、「こぼさないでね、こぼさないでね」って言いながら。(ビール)

このエピソードでは、保育者自身も「謎のルール」と言っているように、子どもが伸び伸びと遊べば当然起こってくる砂がこぼれるという現象を、園の「ルール」として禁止している。砂場の砂が減少するのを防ぐために言われ始めたことなのかもしれないが、少なくともこの保育者はルールが決められた背景を理解しておらず、そのルールによって子どもたちの遊びが制限されていると語っている。子どもが自分の意思によって遊ぶ自由遊びの時間は、主体的な遊びを支える保育を行う上で、重要な保育場面である。しかし、そこでも子どもの遊びの質とは無関係なルールにより、豊かになるはずの遊びが委縮している姿を読み取ることができる。

このように、我が国の保育が、子どもが具体的・

直接的な体験を通して主体的に遊び、学んでいくことを中心課題としている現在でも、一部の園においては、その実現とは程遠い現実があることが浮き彫りになったといえる。今回調査に協力いただいた保育者のほとんどが、このような発言をしていることを考えると、「一部の園」の問題として看過することができない現実であると考えられる。

## (2) 就業体系、人員不足、時間的制約による制限

ここに分類されるものは9エピソードである。特に「新記録と涙」の映像を見たあとの発言が多くなっている。子どもたちがクラスに戻った後も、長縄跳びの記録に挑戦し続ける女兒に対し、1人の保育者がずっとついて縄を回している様子に、自園においては、保育者が子どもの遊びに合わせることをできない現状であることを語っている。

やっぱりどんなにこっちは待ってあげようと思っても、例えば、どっかで詰まってくんですよ。1時には、パートの先生が上がっちゃうからここまでにはやっぱり寝てくれないと1人じゃ見れないとか、何時までに食器を下げないと給食室からクリームが来るとか、クラス内で余裕をもってやっていいよって言えるところの限度がくる。(涙)

このエピソードでは、子どもに添って保育しようと努力しても、限界がすぐに来てしまう現実が述べられている。その原因がシフト制で勤務する保育士の勤務状況や、園内での時間的取り決めが優先されることにある。また、次のエピソードにも見られるように、人員不足は大きな阻害要因となっている。

そこまでやってる人の余裕がない。(中略) 例えば、縄跳びだけじゃなくて、嫌なことがあってうわーってなってる時に、その子にそこまで時間を割いてあげられない。だから、わーってなってる時に多少は割いてあげて、これこれこ

うだからねって話はできるけど、本人が心の底から納得できるまでそばにいてあげられないし、「ちょっと1人で考えなさい」って言って、1人でずーっと考えて、「考え終わったら戻ってきなさい」とかって言って、やっぱり人が付いていてあげられないというのが現状ではあるの。(涙)

遊びに十分な援助をすることができないだけでなく、本来子どもが最も大人を必要とする、混乱をきたしている場面、困難を抱えている場面でさえも、保育者が寄り添うことができない現状が語られている。そこに保育者が大きな葛藤を覚えていることがわかる。

この就業体系、人員不足、時間的制約による制限に分類した他のエピソードでも、同じような事柄が語られている。それらを合わせて検討すると、必要最低限の保育者で日々の保育を行う就業体系に伴い、時間的制約が強くなるというものの特に目立ち、これは保育所に共通している現状であった。一方、幼稚園ではさまざまな一斉活動が優先され、子どもが自由に遊ぶ時間が確保できないことによる時間的制約と、1人でクラス全員を保育する場合に一人一人の状況に添うことの難しさが語られた。待機児童解消のため多くの保育所がつくられ、保育の受け皿は拡大しているように見える現在であるが、その結果保育者不足は深刻な課題となり、今回のエピソードのように、直接的に子どもの不利益につながっている現状が明らかになったといえる。

### (3) 物的環境による制限

物的環境については13のエピソードが分類された。物的環境には、園庭や保育室、遊具といった固定的なものだけでなく、紙やセロハンテープ、ハサミといった教材等も含まれている。

次のエピソードでは、予算的な制約が大きく、子どもたちが材料を自由に使える状況にないことが語られている。

自分でやりたいと思ったときにできる材料がすごいそろってるなって思って、うちの保育園は公立園っていうのもあって、節約、節約って感じであんまり…。使えないです。テープも1日2枚までとかって。自分で出して自分でやりたいときにやりたいことをやるっていう環境が整ってないんだ、うちの園。(タワー)

予算内に教材費を抑えるため「テープは1日2枚まで」という細かな制約があり、子ども自身がいろいろな素材にふれ、選択し、試行錯誤しながらものを作ったり、表現したりすることができない状況が示されている。保育者自身も「自分で出して自分でやりたいときにやりたいことをやる」環境ではないと述べているように、物的環境による制限は、子ども自らが選択する余地があまりないだけではなく、時間的な制約も受けることになる。たとえば、それは次の園庭についてのエピソードに顕著である。

本当に狭い園庭なんで、1クラス出たらそれでいっぱいなんです。だからやっぱりそうなると、あんまりお散歩とかには行きにくい0歳ちゃんが園庭にいたら、じゃあいるからうちはちょっと散歩公園にしちゃおうかみたいなども。公園でやっぱりそんなダイナミックには遊べないし、それができるのはやっぱり園庭限定かな。(ビール)

狭い園庭をクラス間で譲り合って使うために、使える時間が限られること、またダイナミックな遊びが展開しにくいことが語られている。このエピソードの園は小さいながらも園庭があるが、他の保育者のエピソードでは園庭がなく、近隣の公園へ散歩に行かなければならない困難さも語られていた。公園に行くためには、子どもが何をしたいかにかかわらず、クラス全員の子どもたちを連れていっしょに出かける場合がほとんどだろう。そこでは外遊びの時間や場所が限定されるだけで

なく、室内遊びの選択もできないことになる。

このようにそもそも子どもが生活し遊び、学ぶ場としての物的環境が整わない園が少なくない現状が明らかになった。特に園庭に関しては、近年規制が緩和され都市部を中心に園庭のない認可保育所も数多く新設されるようになってきている。近隣の公園をもってその代替とできることになっているためであるが、今回のヒアリングでは公園まで乳幼児を連れて行き来する困難さ、公園では十分に子どもの主体的な遊びを展開しにくいことが示されたと言える。また、厳しい予算管理のために物的環境が制限される現状は、今回の教育要領・指針の改訂において、カリキュラムマネジメントに基づき、園運営との整合性を求められていることを考えると、公立園であってもその解釈に大きな幅がある現状が浮き彫りになったといえる。

幼稚園、保育所は子どもが安定した情緒の元、主体的に遊び学ぶ場であり、そのために整えられている場である。しかし、今回の調査において明らかになったのは、子どもの主体的な遊びを支える保育実践を行う場として機能することが困難な環境の中で、保育者が大きな葛藤を覚えながら保育している現状である。このような状況は一保育者の努力では解決することが困難であり、設置者の変革が求められるという点も大きな課題である。しかし、それ以上に深刻な課題は、このような中で保育している保育者はその経験の中で、環境に順応し、次第に疑問や葛藤を感じなくなるという点である。次のエピソードでは改善の可能性を探ることもなく、その状況に順応していく様子が語られる。

遊ぶ場所もラインが引いてあって、このラインでブロックやって、こっちのラインでパズルやってとか、やってるので。(中略)「こっから出ないで」とか言ってるので、んーって思いながら、ちょっと慣れてきちゃった部分もあるんですけど。 (タワー)

ラインで遊び場所を仕切ることや、子どもがラインをはみ出して遊ぶたびに注意を促すことに、初めは戸惑いや疑問もあったのだろう。しかし、日々の保育の中で繰り返されるうちに、「慣れてきちゃった」と述べている。保育者の一存で変えられないものであるならば、その状況に慣れて何も感じなくなる方が日々の保育がしやすい。保育に対する疑問や葛藤は、より良い保育へと改善していくための原動力でもあるが、こうした保育者の意識の変化は、改善可能な事柄でさえ放置し続けることにもなるだろう。外的要因がもたらす深刻な課題といえる。

#### 4. 内的要因

では、次に内的要因についてみていきたい。園の保育方針や就業形態、物的環境といった、一保育者にはどうすることもできない外的要因とは異なり、保育者自身の問題に帰するエピソードを内的要因として分類した。内的要因に分類されたエピソード数は24である。

##### (1) 実践力の不足

主体的な遊びを支える保育実践を困難にしている内的要因として、保育者の実践力の不足があげられる。保育者が語ってくれたエピソードからは、子どもの興味関心を引き出すことや、適切な関わり方や声かけ等を難しいと感じていることが浮かび上がってきた。

##### ① 子どもの興味関心

映像視聴後、多くの保育者が語ったのは、自分には、遊びの中で子どもの声を聞き、興味関心を引き出すことができていないという振り返りであった。

すごく上手に子どもたちの意見を聞きだしてる。私は全然そことかできないんですけど。

(タワー)

また、自分個人の力量不足だけでなく、ほかの保育者も含めて園全体としても子どもの興味関心をとらえることができているという発言もみられた。

子どもの興味関心を拾うのがうまい先生たちだになっていうのをすごく感じて。うまいこと乗せて盛り上げてあげられるのが、多分、保育者としてはいいんだろうなと思うんですけど、やっぱり自分が保育してたりだとか、保育園の中での保育を見てると、そこまで上手にアンテナを張って、引っ張ってこれるっていうのはなかなか少ないのかなっていうのは、すごく今、映像を見ていて感じていて。(タワー)

ここでは、子どもの興味関心をつかむことの難しさだけでなく、そこから保育を展開することの難しさも語られている。

## ② 展開の難しさ

では、子どもたちの興味関心を展開していくうえでの難しさとは何か。次のエピソードのなかでは「バランス」が難しいと述べている。

その中で保育者が適切かつ入り過ぎない声かけをしなきゃいけないだなんて思って、主体性とバランス？ 口出ししすぎてもいけないし、大きければ大きいほど考えられるから、難しくなってくるなって思いました。発想は広がるけど…。例えば、これだったら、箱を高く積むっていう目標に向かって、それをまとめていくっていうか、方向は今、一つに向かっているじゃないですか。(中略) それを、広がってっちゃうところを、なんていうんだろ。難しい。主体的でしょ。主体性が、子どもの、やっぱり違うから、ぶつかってるところをうまく間に入りつつ、(中略) じゃあ何がいけなかったっていうところに持ってく、こっちの声かけとか。手助けもまだ必要だから、そのバランスが難しいかなって。(タワー)

保育者が入りすぎると保育者主導になってしまうし、まったく関わらなければ子ども一人一人の思いがぶつかり合って、一つの方向にまとまって展開していくことは難しい。ここでは、子どもの主体性と保育者の援助のバランス、一人一人の子どもの主体性と全体とのバランスの2つのバランスについて言及していると思われる。そのバランスをとりながら展開していくことの困難さが繰り返し述べられている。

## ③ 主体的な保育に対する理解不足

一方、子どもの主体性を大切にしたい保育を掲げながらも、主体性の捉え方が保育者によって、あるいは園によって異なっていることが示された。たとえば、次のエピソードでは、子どもたちに意見を聞くことを、「主体的」ととらえていたことがわかる。

結構主体的なっていう子どもたちの意見を聞くことは多くても、最終的には、職員が「そうだよね、そうだよね、じゃあこうしようよ」、最終的に保育者がまとめちゃうことと違って多いから。(タワー)

主体的とはいうものの、子どもから意見を聞くだけにとどまり、子どもの遊びや学びにとって重要な、その後の過程や展開について、それほど意識されていない状況がうかがわれる。また、次のエピソードでは、年少の子どもたちが、年長児の姿をみて真似をすることを「主体的」ととらえている。

お兄ちゃんお姉ちゃんの姿を見て、遊びだけに限らず生活の中でお兄ちゃんお姉ちゃんがやっていることとか、遊びも鬼ごっこまねっこしてみたりとか、そういうところで興味関心が持てるように、5歳児のお兄さんこんなことやってるよみたいな声掛けはしていくけど、こんなん見ちゃったら主体的でも何でもないとか思って…。(タワー)

子どもが興味や関心をもてるような保育者の働きかけや、年少児自らが興味や意欲をもって、年長児の遊びや生活を真似していくところに、主体性をみいだしていたのだと思われる。このように、「主体性」や「主体的な遊び」と同じ言葉で表現していても、個々の保育者によってとらえ方や、思い描いているものが異なっていることがわかる。これらのエピソードは、実践力の不足というよりも、主体的な遊びに対する理解が十分でなかったために、実践にいたることができない事例だといってよいだろう。

以上、みてきたように、主体的な遊びを支えるためには、子どもの遊びをとらえる洞察力や、子どもたちの興味関心に即して、全体と個のバランスをはかりながら、その場で瞬時に判断し、適切に関わることができるスキルと柔軟性が求められる。しかし、こうした難易度の高さに加え、認識や経験不足、自信のなさが主体的な遊びを支える保育実践を阻む要因になっていることがうかがえる。

実際、2カ所に勤務し、異なる保育形態を体験した保育者は、子どもの主体的な遊びを大切にしたい保育よりも、すべきことが決まっている現在の保育の方が「やりやすい」と述べている。

ある意味やりやすいですよ。だから、正直言ってやりやすさも感じてるんですよ、今、この、規則正しく過ごしてる1日に慣れてしまえばやりやすいです。こうしましょ、ああしましょ、こうだから、次、こう動けばいいとかって、あまり考えないですよ。 (ビール)

保育者主導で、子どもに指示を出す保育は、確かに保育者にとって「やりやすい」だろう。その場で、どう判断して対応すべきか悩むこともない。しかし、やりやすさを重視するなかで、子どもを見失っていることを忘れてはならないだろう。

## (2) 保育者間の連携

保育は1人で行うものではない。共に保育にあ

たる他の保育者との間の共通理解や連携が必要不可欠である。保育者間の連携がうまく機能せずに実践の阻害要因となっていると考えられるのは6エピソードであった。今回の調査対象者が、勤続年数4年以下の比較的若い保育者が多かったこともあるが、子どもの思いをくみとってあげたいと思う一方、ほかの保育者の目が気になり、気兼ねや萎縮しながら保育している状況が示されている。

他の先生がこの遊びをしててどう思うのかな？とか、分かんないですけど、そういうふうに思っちゃう、私は。すごい気にしちゃう。年下だっていうのもあるからあれですけど、すごい気になることがある。(中略) A先生のクラスがずっとコマをやったりして、他のクラスの子がやりたいって言ったときに、どこまで入っていいのかなとか。 (ビール)

先輩保育者にどう思われるのかが気になり、子どもたちと存分に遊び込めない状況や、他のクラスの子どもたちが夢中になっている遊びへの関わり方に対する迷いが語られている。本来であれば、子どもから子どもへとコマ遊びが広がるきっかけにもなったと思われるが、保育者間の連携不足のために子どもの遊び自体も制限されることになっている。

次にあげるのは、保育者間の連携不足に加え、保育観や遊びに対する考え方の相違が、保育者だけでなく子どもを萎縮させることにもなっているエピソードである。

でもやっぱり他の先生から嫌な目で見られます。だから、ここではやらないでって、他の人がいないときに言われたりしてます、子どもが。かわいそうだなって。だから、私たちも遊び終わったら園庭を流しに行ったりとか、そうして。自由にできる環境っていいなって、すごく思います。 (ビール)



この保育者はできるだけ自由に泥んこ遊びをさせてあげたいと奮闘しているが、他の保育者から「嫌な目」を向けられたり、陰で注意されたりすれば、子どもにもその意図は伝わっていく。主体的な遊びを支えていくためには、保育者間のチームワークの構築は、重要な課題である。

## おわりに

以上、見てきたように、どの保育者も映像で見た実践を自園で実践する困難さを語った。その要因として園の方針やルール、就業形態、物的環境等による外的要因と、保育者自身または保育者集団が抱えている課題によって、保育実践が阻まれている内的要因に分けられた。

また、今回の調査では保育者の直面している困難には、いくつかの段階があることが示唆された。園での環境等一保育者では解決が困難だと思われる事象により保育者が実践できない段階。そのような環境が整っていたとしても子どもの主体的な遊びを支える支援についての力量不足が実践の展開を困難にしている段階。力量の点で何らかの改善が可能でも園の保育者全体の関係性やチームワークが実践を困難にしている段階である（図1）。

主体的な遊びを支える保育実践を困難にしている要因について、その現状の一端を明らかにすることができたといえる。しかし、問題は想定して

いた以上に複雑で、多くの保育者がままたらない環境の中で、それでも子どもたちのために懸命に保育している姿がみられた。子どもたちの主体的な遊びを支える保育実践は、保育者としての高度な専門性やスキル、保育者間のチームワークが求められることはもちろんだが、時間的・人力的余裕、制限の少ない環境が必要となってくる。まずは主体的な遊びとは何かについて、園として共通理解を深め、外的要因の改善をはかっていかなければ、前進していくことは難しい。

今後は、今回示された実践を困難にしている3段階の要因について、さらに調査対象者を増やして検証していきたい。さまざまな経験年数、役職の保育者も調査することで実像をより鮮明にし、各段階に応じた実践改善のポイントについて具体的に示していくことができると考える。

## 参考・引用文献

- (1) 上村晶 (2017) 「教育実践をデザインする幼稚園教諭の視点と役割——教師の経験年数に伴う計画的及び協働的な環境構成のあり方に着目して——」『桜花学園大学保育学部研究紀要 第16号』
- (2) 坪井敏純・松元直美 (2017) 「子どもの主体的な活動を生み出す環境をつくる——子どものつぶやきを手がかりとして——」『南九州地域科学研究所報 第33号』
- (3) 中坪史典 (2017) 「子どもの主体的な遊びの特徴とそれが引き出される背景」『発達 150』(pp. 12-17) ミネルヴァ書房
- (4) 秋田喜代美 (2017) 「主体的な遊びを育てることの価値とアポリア」『発達 150』(pp. 18-22) ミネルヴァ書房
- (5) 中坪史典 (2016) 「主体的に遊ぶ子ども——遊びを支える保育者」『映像で見る主体的な遊びで育つ子ども あそんでぼくらは人間になる』(p. 124) エイデル研究所

(ささき ゆみこ) 東京未来大学  
(おおたに まりこ) 百合丘めぐみ幼稚園

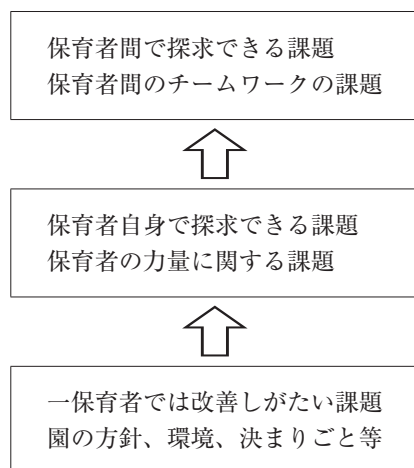


図1

